



ベンチの中央がユリアンティさん

近年、介護業界では、深刻な介護人材不足を背景として、全国各地の施設で外国人介護人材が活躍しています。社会福祉法人佐久福寿園（佐久市岩村田）で働く、ユリアンティさんもその一人です。

新生活に期待を膨らませ、令和2年12月、EPA（経済連携協定）に基づく外国人介護福祉士候補者（以下、EPA候補者）としてインドネシアから来日したユリアンティさん。入職4年目を迎えるこの春、外国人にとって難関とされる介護福祉士国家試験に見事合格し、EPA介護福祉士として新たなスタートを切りました。

仕事の傍ら勉強に励んだ毎日。介護福祉士国家試験に見事合格！

EPA候補者の介護福祉士国家試験受験者数は増加傾向にあるものの、合格率は全体の約半分の40%前後といわれており、今年度、長野県内でも合格した者はわずか4人という結果でした。外国人介護人材が介護福祉士国家試験に合格するためには、介護の専門的知識や技術に加え、相当な日本語能力が求められます。慣れない異国での生活の中で、働きながらの試験勉強は決して容易ではありません。さらに、ユリアンティさんが佐久に来た頃は、全国的に新型コロナウイルス感染症が猛威をふるい、仕事の面だけでなく私生活においても多くの制限を伴う時期でした。

そんなときも実直に、仕事の傍ら勉強に励んできたユリアンティさん。これまでの日々を振り返り、国家試験合格までの道のりや介護の仕事に対する想いについてお話をお聞きしました。

○合格発表を聞いたときはどんな思いでしたか？

「すごく嬉しかったです。休みの日は8～9時間、仕事のある日も1～2時間は勉強をしてきました。体調不良になることもありましたが、その時は仕事に万全で臨めるように勉強は休み、仕事を優先しながら勉強を続けてきました。これまで施設の皆さんにたくさん教えてもらいました」

○職場の皆さんやご家族はどのような反応でしたか？

「施設の皆さんも家族もとても喜んでくれました。施設の皆さんからはたくさんのお菓子をプレゼントしていただきました。今度、合格パーティーも開いてくださるそうです。インドネシアにいる両親は、私のことを理解してくれており、日本で介護の仕事をしていくことを応援してくれています」



○勤務先である佐久福寿園や佐久市での暮らしについてどのように感じていますか？

「ジャカルタで行われた EPA の集合面接会に、複数の介護事業所が来ていたのですが、施設長の人柄に惹かれたことが一番の決め手で入職を決意しました。ここは施設長をはじめ施設の皆さんがとても優しく、困ったことがあれば丁寧に対応してくださり、アットホームなところが魅力です。休みも含めとても働きやすい環境です」
「佐久市は涼しく住みやすいです。私の地元にも似ていて、東京にも近く、便利だと思います」

外国人である私にとって最も大切なものは、コミュニケーション



○介護福祉士に合格してから、仕事に対する気持ちに変化はありましたか？また、日頃どんなことを大切に利用者さんと関わっていますか？

「私は、入職したときからずっとゲストの安全を第一に考えています。それは今も変わらないと思いますね。外国人である私にとって、コミュニケーションはとても大事です。言葉づかいとか、それが大事だと思っていて。介護技術もちろんそうなんですけど。ミスコミュニケーションがあれば、他の職員から教えてもらったりしながらやってきました」

「次は、ケアマネジャーの資格もとって、ケアプランの作成などもやってみたいです」

○この3年間、介護の仕事をしてきてどのようなことを感じましたか？

「インドネシアの看護学校を卒業し、将来看護師としてどのように生きたいかを考えたときに、介護分野に興味を持ち、先進的な日本に来ることを決めました。日本の介護は、最期のその時まで高齢者を大切にすることや

看取りに対する丁寧な姿勢に魅力があります。インドネシアは、ターミナル（終末期）の人は、病院で看とることが多く、施設で看取られる方はあまりいないんです。だからここに来て、こういうことがあるんだと知った時はびっくりしました」

「介護の仕事は大変なこともあるけれど、ゲストの方と話しているうちに、それも軽く感じたりします。

『ユリさん、お願いします』『ありがとう』と言ってもらえることがとても嬉しいです」

国境を越え、未来を照らす介護の光。後輩にとっての道しるべ。

そんなユリアンティさんについて、施設長の和田裕一さん、介護サービス部長の原田明恵さんにもお話を伺いました。

「彼女は、私たちの施設では初めての EPA 候補者なので、思い入れは強いですね」そう話す和田さん。受入れに向けて、これまで、住居の確保や生活の支援、学習時間の確保、メンタルヘルスなどのサポート体制や職員、利用者への事前説明など様々な準備を整え、EPA 候補者が安心して働ける環境づくりに向けて尽力されてきました。



和田さん：「彼女の学習意欲の高さは本当にすごいと思いますね。夜中にも勉強していましたし、本人の努力が本当にすごいと思います。外国人材にとって介護福祉士国家試験は難関なので、これから先も同じように順調にとはいかないと思いますが、彼女の存在は、後輩にとってモチベーションになると思います」

原田さん：「施設に入居されている方で、脳梗塞で入院し右麻痺がある状態で退院された方がいました。ユリさんは日々のケアの中で、わずかながらも右手が動くことをよく観察しており、職員会議の際に、『食事の時に右手を使ってみてはどうか』と提案がありました。日頃からユリさんの観察力は素晴らしいものがあり、右手を使った食事介助が始まると、それからメキメキと機能を回復されたといったことがありました。ユリさんの介護に対する姿勢は本当に素晴らしいです。ユリさんをご指名する方もいますし、利用者、家族からとても喜ばれている存在です」

施設では、今後の新たな EPA 候補者の育成にも携わってほしいと期待を寄せています。

（インタビューをしてみて）

母国を離れ、遠く異国の地で多くの経験を積み重ね、そこから学び、成長してきたユリアンティさんの努力に感銘を受けました。日本とインドネシアという違いがあるからこそ、相手を尊重し理解しようとする想いや気遣いにあふれ、そうした姿勢が、利用者、家族だけでなく職員を含む多くの人に受け入れられていると感じました。そして国境を越え、互いから学びあい、尊重しあう姿勢が、この温かい現場を作っているのだと感じました。

現状維持に満足することなく、さらに高みに向けて自己研鑽をするユリアンティさんを今後も応援しています！